

- ① 認知症グループホームにおける終末期介護に関して・～利用者御二人を看取って～
- ② 医療法人あいち診療会 グループホームいろり庵
- ③ 野瀬 真孝 (マネージャー)
- ④ 藤村 淳子 (あいち診療会 理事)
- ⑤ 以下へ記入

<はじめに>

認知症介護の切り札、といわれるグループホームであるが利用者が終末期を迎えるにあたっての対応についてはあまり議論がなされていない。今回我々は認知症グループホームにおいて、二名の利用者の終末期介護を経験したので報告する。

<症例と経過 1 >

○氏 92歳 女性 認知症 慢性心不全 高血圧症

2005年3月重度の大動脈弁狭窄と心不全で入院。関係医療機関療養型病床を経て、6月1日～グループホーム入居される。翌年2月軽度の意識消失発作起こしてからは体調が不安定に。9月に腹膜炎発症、絶食と補液、抗生剤投与にて一時改善するも経口摂取再開で悪化。重度心不全および腎不全のため外科的介入は困難との結論に達する。家族に介護力が無くグループホームでの看取りを希望される。本人も最期は友達に囲まれていたいと希望され、グループホームで終末期を迎えることとなる。10月利用者の最期の希望で自宅の仏壇を拝みに行く。腹膜炎発症後は「痛い痛い」が口癖になっていた利用者がしっかりと拝まれる。それまで○氏と家族の関係はうまくいっていなかったがその姿を見た家族は涙し、以降、頻繁にグループホームに泊まりに来るようになった。2006年11月26日夜、娘に手を握られながら永眠される。

<症例と経過 2 >

A氏 88歳 女性 認知症 慢性心不全 両側変形性膝関節症

2002年夫を亡くしてから独居が続く。5人の娘あり。2005年6月1日～グループホーム入居される。入居中、尿路感染症や脱水など繰り返されるもおおむね元気に過ごされる。家族関係は良好で娘達との外泊や外出などよくされていた。2007年1月、3日前まで大晦日、元日と娘らと共に自宅ですごし、はしゃいでいたが同年1月5日の朝急変、生まれ育った町の空を見ながら永眠される。

<考察>

○氏は終末期を迎えるにあたり、自分の居室ではなく、居間が見渡せる畳の間にて最期を迎えた。本人の馴染みの友達の顔を見ていたいとの希望からだった。それに対し、他利用者の反応は様々であった。話しかけ看病してくれる方、遠くからただ見守る方、いずれ来る死を感じて目をそむける方。A氏の死は突然で同居者を亡くした利用者の心理状態が心配された。しかしどちらの事例も利用者は素直に死を受け入れ、亡くなられた利用者の家族や我々職員の心配をされた。ケアを受ける側と与える側の立場の逆転が起こったのであ

る。一般にグループホームでの看取りに消極的となる理由の一つにあげられる利用者の死亡による他利用者の心理面でのショックは我がグループホームには当てはまらなかった。

<まとめ>

我々は「利用者とその家族が住みなれた地域で安心して終末を迎えられる」ことを理念に終身型のグループホームをめざしている。今回利用者御二人の終末期介護を経験し、利用者とその家族の終末期の迎え方について深く考える機会を得たので報告した。